

## ACC主催セミナー「見ることの諸相」を受講して

青山真樹

2009 年度 ASP 学科卒業生

私たちは、とくに意識する事なく「目に映る像」がそのまま「見えているもの・こと」だとして処理している。そして、それらは疑いようのない「事実」だと。しかし、どうやら“見る”という行為は、ひとつの事実を認識するという事だけではないうだ。

今回、私が受講した ACC 主催の当セミナー。前半はどのように私たちの目が、色や像を捉えているのかを佐藤先生のレクチャーによって紐解いていった。と同時に、いかに自らが「見たいものを見たいように見ているか」ということが露に。まずは、私たちの視覚に対する絶大な（しかし無根拠な）信頼にピシッとヒビが入る。続く後半のワークショップでは、上下/左右が反転して目に映るという眼鏡をかけながら、線を描いたり歩いたり。見えている時には何てことない行動のひとつ一つが、ただ反転するだけで信じられないくらいにままならなくなる。「天と地（もしくは右と左）が反転しているのだから、普段と逆に手や足を動かせばいいんだ」なんて、頭でいくら考えようとも、実際に身体が言うことを聞いてくれないのだからもうお手上げだ。わかっちゃいるけど止められない。視覚の支配力に驚く。

私たちの行動、思考ともに深く関わっている視覚。その不確かさと、しかし、どうしようもなく捕われてしまう自分自身を痛感した後に、佐藤先生は私たちにこう語りかけた。



（講義の様子）

「それまで出来ていたことが出来なくなった瞬間、個人のアイデンティティーは揺らぐ。」

とっさに、4年前の自分を思い出す。ちょうど授業で ACOP のナビゲーションの練習をしていた私は、それまで難なく出来ていた（実際にはそう思っていただけなのだが...）人とのコミュニケーションが上手いはずなのに苦しんでいた。「出来るはずなのに」「出来ていたはずなのに」という思いに捕えられたまま、前に進めずにいたのだ。あの時の苦しさを思い出すと、いまだに変な汗が出てきてしまう。佐藤先生はさらにこんなふうにした。

「でも出来なくなった時、ふいに周りの声が耳に入ってくる。そうすると、例えば視覚がままならなくても歩けるんです。」

視覚をはじめとし、不確かな自分の感覚に捕われている限り、“事”は起こらないということなのかもしれない。



(ワークショップの様子)

さらに「アイデンティティー」について思ったことを少し。今回、同じくワークショップを受けていた知人たちの行動に、“その人らしさ”を見た。それは、その個々人が様々な経験や人・物・事との関わりの中で知らず知らずのうちに身につけてきたパターン、クセのようなものだろう。このように、他者（この場合はその人の行動を見ていた私）によって語られる個はアイデンティティーとなり得るのではないだろうか。個が個であるためには、コントロール不可能な様々な関わりが必要となる。個を語る時にも同様だ。

要するに「アイデンティティーが欲しけりゃ関われ！」ということ。個は物でもなければ事実でもない。関係の中で生成され続ける現象のようなものなのだ。「アイデンティティーが揺らく」瞬間、それを“喪失”ととらえ、恐れ、固執するか否かは結局自分次第。そんなことを考えさせられた。

見ることはとても大切。だが、見えることだけが全てではない。時に、見えることで見えなくなってしまう事柄だってあるのだ。それは言い換えるならば、見るべきものは常に残されているということではないだろうか。見えていないことに意識を向ける余地は、常に持っていたいと改めて思った。そして、それはコミュニケーションにおいても。

そんな、どこかで聞いたことのある言葉でもってセミナー受講の感想、そしておこがましくもACOP 経験者として、これからおおいに苦しむであろう後輩（1回生、編入3回生）たちへの（笑）応援メッセージとしたい。

最後となりましたが、流れる日々の中でいま一度立ち止まり、このように感じ考える機会を提供して下さった佐藤宏道先生、ACCの皆さまに感謝いたします。ありがとうございました。

## 佐藤宏道先生特別講義を終えて、ACC スタッフより

北村英之  
アート・コミュニケーション研究センター

今回、私たち ACC では佐藤宏道先生をお招きして特別講義を開催し、さらにその受講者であり、ACOP の卒業生でもある青山真樹さんに感想を寄せていただくことができました。まずはお二人と参加者の皆さまにお礼申し上げます。

佐藤先生をお招きするにあたって、私たち ACC では、「見る」ということの不思議について学ぶことをねらいとしていました。普段は意識せずに行っているこの「見る」という行為が、じつは脳の複雑なシステムによって成り立っている。そして、そのことで私たち自身が、私たちの理性の及ばないところで「支配」されていることを知る機会としたかったのです。

とはいえ、こうした視覚のメカニズムをいかに分かりやすく解説いただいても、なかなか納得はいきません。じじつ、私たちは目を開いて、きちんと世界を見ている（と信じ込んでいる）のですから。

佐藤先生の講義では、脳が自分を「だます」具体的な実験を紹介していただきました。音飛びした「エリゼのために」がきちんと音楽として聴こえたり（記憶を駆使して、脳が正しい音楽として処理をしている）、逆に、本当は濃さに違いのない色面なのに、中央部分だけに差異をつけることで左右の濃さが違うと認識したり（境界部分が違えば左右は違うものだと、経験的に判断してしまう）。こうした実験を交えたお話によって、視覚が網膜に写った像だけでなく、脳の中の記憶と経験とを統合して成り立っている（青山さんの言う、「自らが見たいものを見たいように見ている」）ことが、体感的に理解できました。

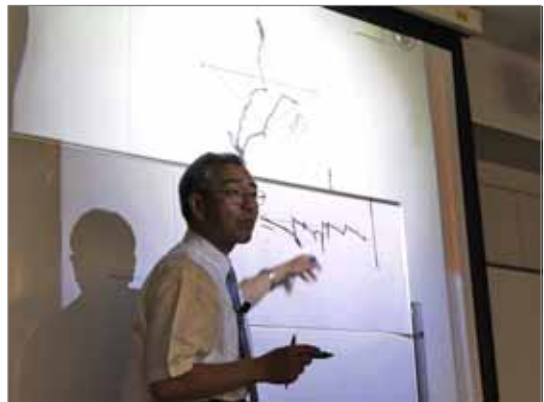
また、後半のワークショップでは、そうした視覚の力を参加者が「身をもって知る」こととなりました。

佐藤先生はさらに、アイデンティティーというキーワードを提示されました。この言葉を手がかりに、講義の終盤では「人と人のあいだにあるコミュニケーション」について追究する ACOP とも関連付けた話題が展開していきました。その中で、「修正の道」という言葉も話題に上りました。

後半の反転メガネのワークショップ中、紙に書かれた約 20cm 大の星形をペンでなぞる課題が出ました。

紙に書いてある線をただ上書きすればいいだけなのに、「左が右、下が上」になっているだけで、まったくうまくいきません。人によっては数ミリ進んでは立ち止まりを繰り返したり、別の人は勢いよくペンを進ませて、そして見事にもとの線はずれてしまったり…。20 人ほどが挑戦して、きれいになぞれた人はひとりもいませんでした。

この線をなぞる行為に沿って、佐藤先生は「無意識レベルの修正」について話されました。例えば普段、ある線の上をもう一度なぞるとき、目で見たとおりに線の上をペンが通るように、手の神経には正確な指示が出される。けれど、それは単発の指示ではなく、絶えず細かなズレを戻す連続した



反転メガネをかけてなぞった星形  
について解説される佐藤宏道先生

指示だということです。反転メガネをかけた人も、もとの線から逸れる度に数ミリ、数センチずつの補正をしていました(ただし、その補正も反転しているので傷口は余計広がるというからくりもありましたが...)。反転のせいで振れ幅が大きくなっていますが、じつは、こうしたブレと修正の繰り返しは日常の中でも行われているということです。

「これだ!」という正解を決めてから一直線に動くのではなく、進みながら絶えず修正を繰り返す。その営みは閉じることなく、終わることなく続いていく。これは、言葉を発して、それを聞いて反応を返して、さらにまた新たな反応を返すという、コミュニケーションの仕組みとまったく同じといえます。

こうしたコミュニケーションの本質と、アイデンティティと、そして世界を捉える視覚のメカニズムについて、頭と身体をフルに使って考える3時間の特別講義となりました。

ところで、佐藤先生は講義スライドの中で、ACOPにとってはとてもなじみ深い作品である、アンドリュー・ワイエスの《クリスティーナの世界》とその関連作品を時おり提示されました。私たちとは事前の打合せがなかったのに、光の表現や距離感の捉え方の例としてこの作品を選ばれていたのには、正直とても驚きました。4月からたくさんの作品をみて、考えて、その中でコミュニケーションとは何かを考え続けてきた学生たちにとっても、大きな節目になる特別講義でした。改めてスタッフとしてお礼申し上げます。



京都造形芸術大学

アート・コミュニケーション研究センター主催セミナー

「見ることの諸相」

講師：佐藤宏道氏（大阪大学大学院医学研究科教授）

日時：2010年7月1日（木）13:30～16:30

場所：京都造形芸術大学人間館 3F・NA302 教室

参加者：約70名